

古代の瓊々杵、海

今は昔、その大昔から記紀にいうところの瓊々杵をも含む、吉備の仲海にまつわる物語の幾つかから、瓊々杵の変遷をさぐつてみたいと考えた。

黒日売物語
（くろひめものがたり）
仁徳天皇は吉備海部直の女（まさかのあま）の黒日売が黒髮豊かに大へん美しいと聞かれて、吉備

國からわざわざ宮中（みやちゆう）に召し寄せてお使いになつた。ところが黒日売は皇后の石之日賣命（いわのかひめのみこと）が大へん嫉妬深いのを恐れて、故郷の吉備國へ逃げ帰つた。

吉備國へ帰る黒日賣の乗つた船を高殿（たかどの）から見送られた天皇は、「神の方には小舟が連なつてゐるのが見える。いとしいわが妻が故郷へ下つて行くことよ。」と歌を詠まれた。この歌を聞いた皇后はひどく怒つて、人を難波の大浦に遣わして黒日賣を船から追は降した。そのため黒日

売は泣く泣く陸路を歩いて帰つていつた。

黒日賣を恋しく思う天皇は、「淡路島を見に行きたい」と皇后をだまして、淡路島へ行きそこから島伝いに吉備國へ渡つて行かれた。

そして、黒日賣の手づくりの料理を味わつたり、山畑で黒日賣と青菜摘みを樂しまれて、大和へお帰りになつた。

古代の海と吉備氏
（こだいのうみとよしとし）
吉備路風土記の丘

県立自然公園の中にある「こうもり」古墳と呼ばれているが、古墳が、黒日賣の墓と伝えられているが、古代、強大な勢力をもつていた吉備氏は、鉄資源の開発や土器・織物などの生産技術とその生産力、さらには強大な兵力を持つなど、四世紀ごろの大和政権にとつて対朝鮮軍事経営の大きな基盤として、吉備氏はなくてはならない存在であったと想像される。

そして物語に出てきた吉備海部は海人として、港湾管理や軍兵・物資等の輸送に当つたものと考えられ、その根拠地は邑久郡南部地方、とくに牛窓周辺とみられている。

また、古代の航路は播磨灘から邑久の海岸沿いに西下し、今の児島半島（当時は島）の北側の海域を通って水島灘へ出て備後の鞆へと向うコースであつたようで、吉備の海岸沿いは当時の主航路に当たり、大和と九州との間の要衝の地であつたといえる。

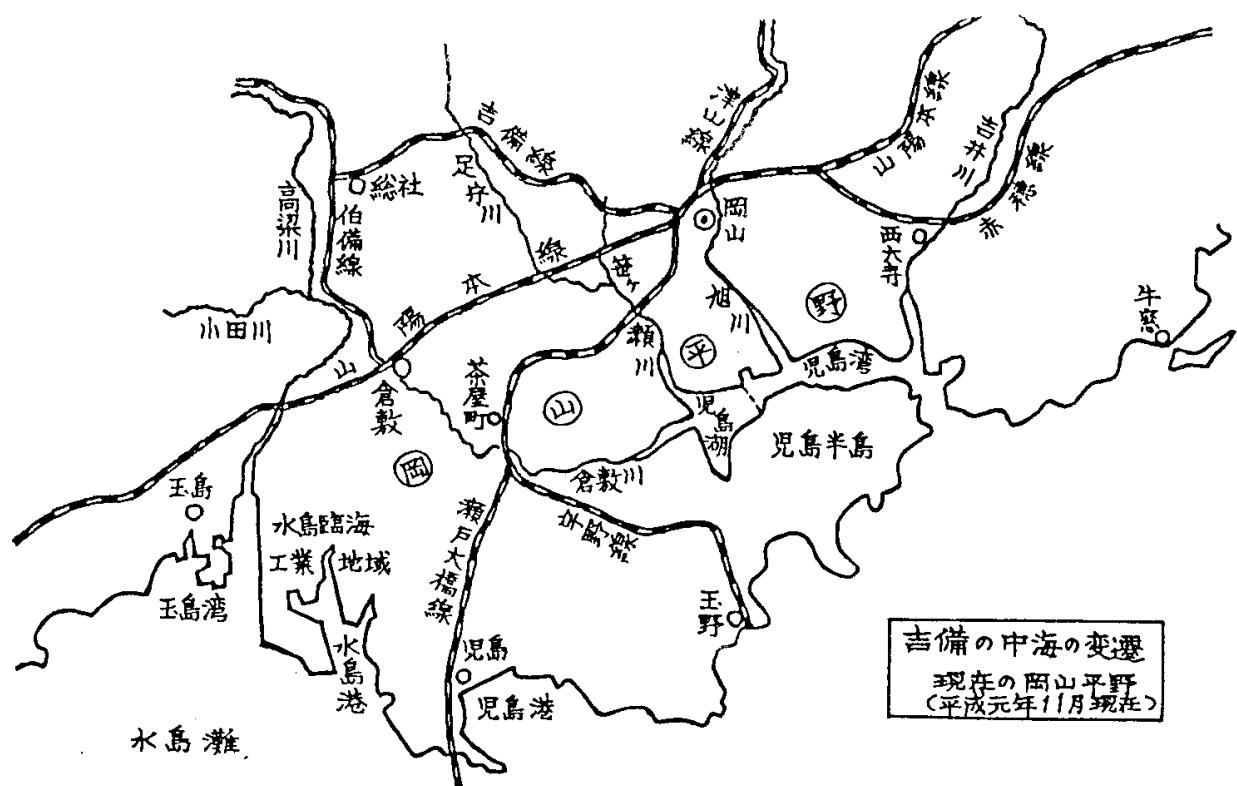
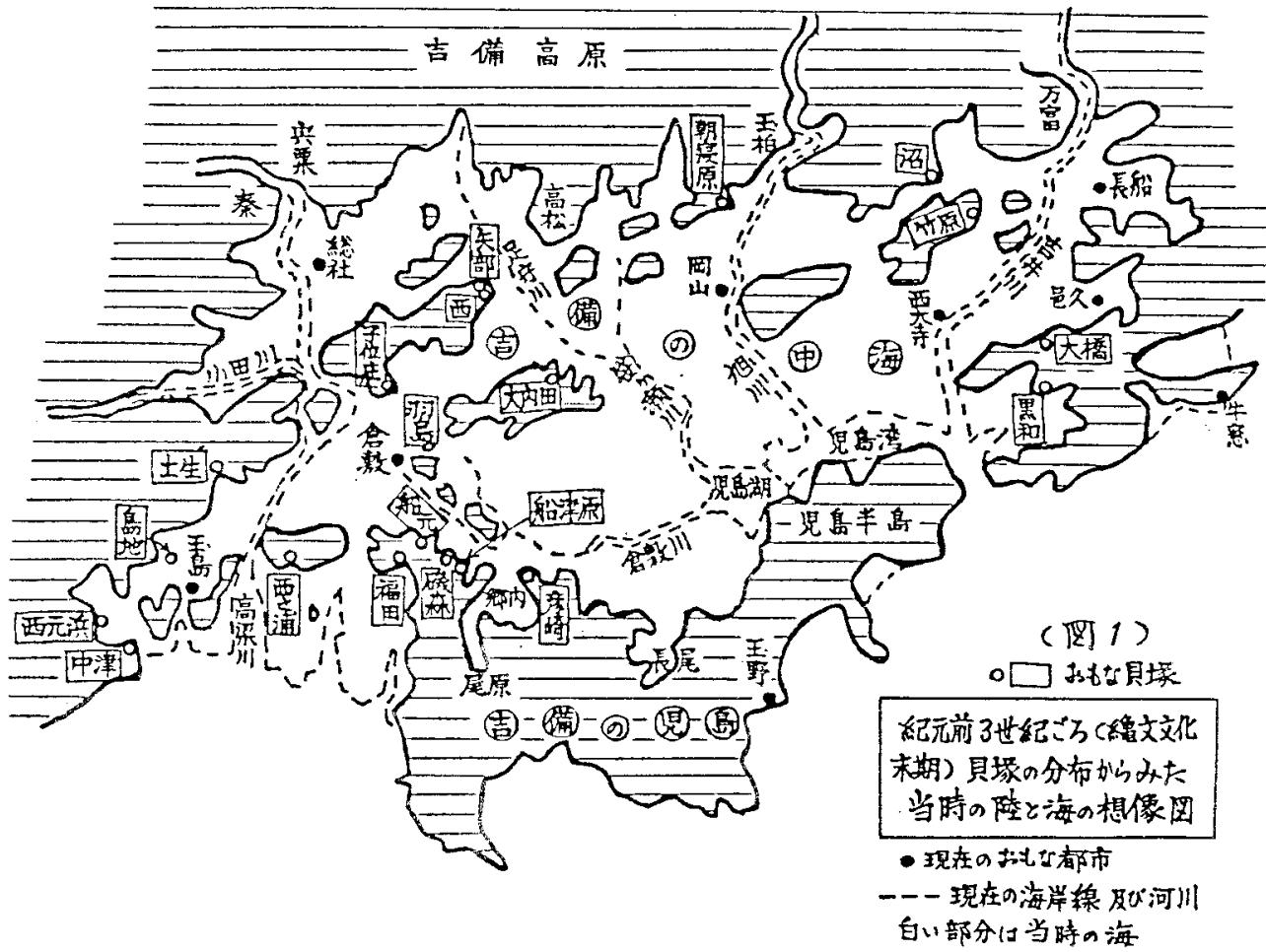
五世紀後半、皇位繼承争いにかかる星川皇子の乱では、吉備氏一族は軍船四十隻を立てて星川皇子の援軍として難波に急行しているが、四十隻もの軍船と兵力がにわかに用意できるほどの強大な勢力を保持していたことが、これによつてもうかがえる。

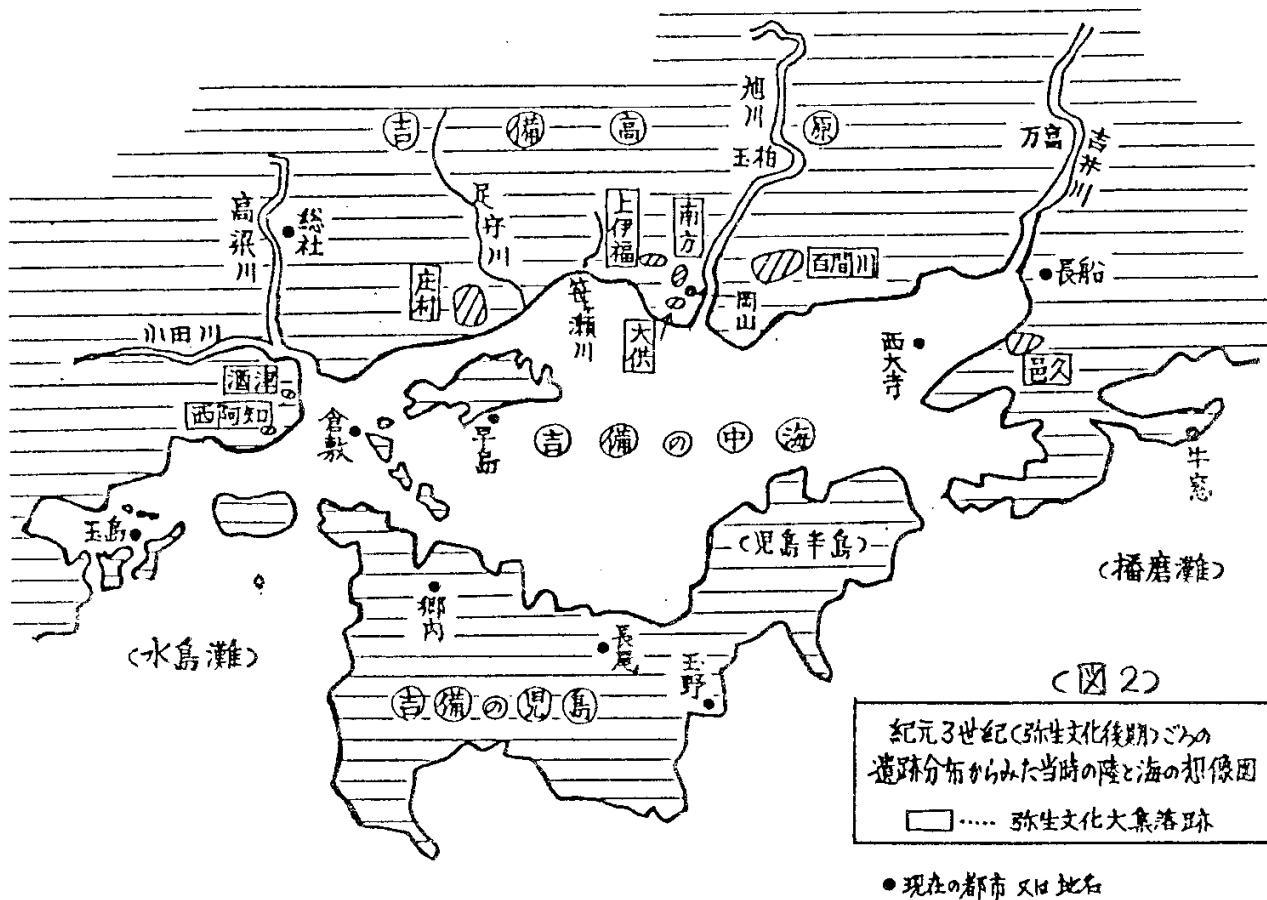
高梁川では秦・宍粟付近、旭川では玉柏付近、吉井川では万富付近まで海が大きく入りこみ、吉備高原の山麓を海岸線とする大きなか中海があつたと想像される。そして、この中海を吉備の中海又は吉備の穴海と呼んでいたようである。（図1）

襄ノ海もまたこの吉備の中海の西端に位置するわけであり、吉備の中海の変遷とともに襄ノ海の移り変わりも考えられるべきものであると思われる。

黒日壳物語にかかる四世紀中ごろの吉備の中海は、三大河川による冲積作用によつて陸地化が次第に南進し、現在の山陽本線沿いあたりにもかくにも三世紀末から五世紀にかけて、

大和政權の確立に陰の力となつた吉備氏一族の地盤が、現在の岡山平野の周辺地域……今から二千三百年～千五百年前の昔には岡山平野は一面の海であつたと考えられている。





(図2)

紀元3世紀(弥生文化後期)ごろの
遺跡分布からみた当時の陸と海の想像図

□……弥生文化大集落跡

●現在の都市又は地名

まで陸地となり、洋海はかなり狭ばめられたと
想像される。(図2)

ところで、考古学の立場からでは、岡山県と
広島県東部にかけてのいわゆる「吉備の南部地
帯」は西日本でも有数の縄文貝塚の密集地とし
て知られており、その縄文貝塚を連ねていけば
縄文時代(紀元前五千年～前三百年)の海岸線
の大要が浮かぶといわれている。(図1)

また、貝塚に含まれている貝の種類から「吉
備の中海の浅海化」の速度は、五百年～千年と
いう長い単位で徐々に変化していったことが推
定され、さらには、現在の瀬戸内海沿岸に点在
する砂洲も、その多くは縄文時代の古い海岸砂
洲と全く同じレベルを保つてゐるものといわれて
いる。